

## もう一つの家族

沖縄県立首里高等学校三年 與座 萌加

「月桃揺れて花咲けば 夏のたよりは南風 緑は萌えるうりずんの ふるさとの夏」  
今年も、沖縄県内の小・中学校でこの「月桃」という歌が歌われる時期を迎えた。私は、高校生になつてからも、慰霊の日を前にこの歌を口ずさみながら、かつて沖縄で起きた悲劇を忘れないとあらためて心に誓う。またこの時期、沖縄の子どもたちは、学校で沖縄戦を生き抜いた体験者の語りを聴き、戦争の生々しさや恐ろしさ、命の尊さを学んでいる。しかし、体験者の減少や高齢化のため、次第にそのようなリアルな語りを聴くことが難しくなってきた。つまり、私たちは、戦争体験者の声を直接聞くことのできる最後の世代だと言える。

その現実には気づかされ、心から後悔していることが私にはある。それは曾祖母の語りを聴けないまま、曾祖母が他界したことだ。中学生の時、曾祖母に「沖縄戦」のことを尋ねたことがある。しかし、曾祖母は語りたがらなかった。優しく笑顔を絶やさない曾祖母が、表情を曇らせ「ごめんね。ばあちゃんは、話したくないさ。」と憂いを帯びた眼を私から逸らした。私は見慣れない曾祖母の様子に動揺し、きつと語りたくないほどの辛い記憶なのだろうと、それ以上追求しなかった。もう曾祖母に「沖縄戦」を尋ねてはいけない。それ以来、私は曾祖母の前で「沖縄戦」という言葉を使うことはなかった。そうして、間もなく曾祖母はいつも通りの笑顔を湛えたまま亡くなった。私は後悔した。曾祖母は、辛い過去に苦しんでいたからこそ、語ることが出来なかったのに、私はそんな曾祖母に寄り添うことができなかった。私は、時間はかかっても、曾祖母の過去を知り、苦しみを分かち合い、癒してあげたかった。そんな私の気持ちに母に告げると、母から思いも寄らない衝撃的な話を聞かされた。

七十三年前、多くの人が恐怖に怯え、死から身を隠し、多くの悲劇を生んだ沖縄戦。曾祖母は、自分の幼い子ども達を連れて、降り注ぐ爆撃の中を命懸けで逃げていた。子ども達の命を守ること、そのために必死だった。だが、沖縄戦が終結したとき、曾祖母はたった一人だった。守りたかった命は失われた。いつ、どうやって、子ども達の命が奪われてしまったのか、その経緯だけは頑なに語らなかつた曾祖母。我が子を

失い生きることが、どれほどの後悔と苦しみを与えたのか計り知れない。語ることも許さないほど、曾祖母は自分自身を責めていたのかもしれない。それでも、絶望の闇に閉ざされた孤独な世界で、曾祖母は生きた。彼女を「生」の道へ引き留めたのは、曾祖父との出会いによって生まれた新たな命だ。私の祖父が産まれ、新たな命のサイクルが私まで繋がってきた。もしも曾祖母が沖縄戦で命を落としていたら、もしも子を失った悲しみで死を選んでいたら、もしも曾祖父と結ばれることなく、孤独に生きる道を選んでいたら、今の私は存在しない。曾祖母が私に語りたがらなかったのは、彼女には戦争によつて無惨に奪われた、もう一つの家族があつたという悲劇だった。

戦争体験者の中には、せつかく生き延びても、人に語ることを出来ない苦しみを抱えている方々もいる。曾祖母のことを知らなければ、私のこの命が、多くの命が奪われていく激戦の中で、繋ぎとめられた大切な命であることを、今も知らずにいただろう。私自身が、戦争を生き抜いた曾祖母の「命の証」なのだ。そんな私たちに課せられた使命は、渡された「命のバトン」を次の世代へ受け継ぐこと。そして、「沖縄戦」を語り継ぐこと。戦争は、曾祖母のような穏やかで優しい人にまで、苦しみを抱えたまま生きる人生を歩ませた。こんなことは、絶対にあつてはならないことだ。私の胸に戦争への怒りが込み上げてくる。

私は、曾祖母と平和の礎を訪れたことがある。曾祖母がそつと手を合わせ、涙を拭いながら語りかけていたのは、曾祖母の失った子ども達の名前だったのだと思う。これから先、曾祖母の代わりに礎に刻まれたその名前に手を合わせ、平和への祈りを捧げるのは私だ。

夏  
「香れよ香れ月桃の花 永久に咲く身の花心 変わらぬ命変わらぬ心 ふるさとの

私は誓う、二度とこの島に悲劇をもたらさない。そして忘れない。この島の過去を。失われた二十万の「命」の重みを受け止め、曾祖母から受け継がれたこの命を、私は精一杯生き抜いていく。